心に響く人々

石川啓三

心を弾ずる人々

石川啄木

文藝春秋

心に残る人々

昭和四十三年十二月二十日　第一刷
昭和四十四年　二月二十五日　第三刷

定価五百五十円

著者　石川達三
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号一〇二
印刷　大日本印刷
製本　加藤製本
製函　小野部製函

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© 1968 TATSUZOO ISHIKAWA　PRINTED IN JAPAN

目次

心に残る人々　三
出世作のころ　一八七

題字　著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心に残る人々

1

牛込余丁町という所は、今はどうなったか解らない。牛込という地名も無くなった。余丁町一帯は戦災でまる焼けになったと思うから、訪ねて行ってももはや見当もつかないだろう。新宿から若松町へ行く電車が、西向天神を過ぎると余丁町の停留所であった。菅原道真は九州太宰府へ流されたので、天神様はすべて東向きに建てられているのに、あそこだけが西に向いた天神様であるらしかった。つまり江戸まで来れば御所は西だという理窟であろう。

その余丁町の停留所で降りて、右の細い道が余丁町で、そこからほんの二三軒目の左側に坪内逍遙の家があった。黒塗りの古風な門構えで、いつも静まり返っていた。さらに二百メートルばかり行くとごたごたした商店街に出る。そのとっつきの炭屋の二階が、岡山から上京したばかりの私の、東京に於ける最初の下宿だった。

余丁町の停留所のそばには、亡くなった作家大鹿卓の家があった。実は彼の姉夫婦の家で、その義兄は社会党の河野密であった。私は一度だけ、中山義秀とつれ立って大鹿を訪ねたことがある。大きな古い家であったが、あれも焼けたかも知れない。

炭屋のおやじはまだ三十代の美男子で、元気の良い男だった。たしか萱沼とか言った。女房に死なれて独りきりであったから、彼が出かけると、二階の下宿人である私が、来客の応対までしなくてはならなかった。Aという質屋だが炭を三俵とどけてくれとか、Bという中華料理だが煉炭をとどけてくれとかいう用件だった。

主人が男世帯だから、私は自炊生活だった。八畳の間に兄と二人の下宿で、兄は陸軍砲兵少尉、砲工学校の学生だった。独り者の炭屋は女房がいないので、ブレーキの壊れた車のように、止め度もなく暴走していたようである。深夜一時二時まで外で酒を飲んで帰ったり、昼間から私たちの居る隣の部屋に仲間を五六人あつめて花札賭博をやったりしていた。軍人の兄はそれを嫌って、下宿を移ろうと考えていたようだった。

炭屋は三度の食事をほとんど外でしていた。時おり近所の洋食屋の女がカツ・ライスなどの出前を持って来た。この女はひそかに炭屋の後妻にはいることを考えていたらしかったが、炭屋の方が取り合わないような様子だった。

そんな訳で炭屋の店は見る見る左前になり、私が早稲田高等学院に入学して間もなく、商売をやめることにしたから転居してくれという通告が来た。私たちは若松町に転居した。そのあとで萱沼は店を叩き売ってしまったようだった。半年以上も経ってから、何かの機会に例の洋食屋の出前の女に会った。すると彼女はせき込むようにして、

「萱沼さんはあのお店を売ってから、まるきり様子がわからなかったんですよ。それが近頃人から聞いたところによると、何だか屋台店を引っぱって歩いているんですって。可哀そうねえ。あの店をまじめにやってれば良かったのにねえ……」と、いかにも残念そうな言い方をした。

それっきり消息は知らない。生きていればもう七十四五にもなる筈だ。

炭屋の近所にコロッケ屋があって、夕方になると店のおやじが油の大鍋でコロッケを揚げていた。或る日私は兄から、「魚のフライを食べたいな。お前、魚屋へ行って鰺をひらいて貰って、それをコロッケ屋でフライにして貰って来いよ」と言われた。

そんな旨い訳に行くだろうかと疑ったが、私はとにかく鰺をひらいてもらい、それをコロッケ屋へ持って行った。店のおやじのその時の表情を、私は未だに忘れない。相手が女なら断ったであろうが、相手は釣鐘マントを着た貧乏学生で、自炊暮しと一眼で解る。大柄なお

やじは苦笑して、魚にパン粉をつけて揚げてくれた。いくら払ったか忘れたが、おやじは困った顔をして、五銭ぐらい請求したように思う。あんまり旨い話だから、私は一度だけしかやらなかった。あのコロッケ屋も戦災で焼けただろうと思う。

私たちが転居したところは、現在の第一国立病院の近処で、二階の八畳は日当りがよくて静かだった。階下は初老の夫婦と、夫人の妹とかいう二十六七のうす汚れた娘との三人暮しで、主人はどこか官庁の雇員のような仕事だった。貧乏くさい一家で、三人とも年じゅう顔や首筋におできが出来ていた。梅毒の気があったのかも知れない。不思議なことに夜になると二人の女が居なくなって、主人ひとりが留守番をしていた。女たちは私と兄とが寝たあとで帰宅する。しばらく経ってから兄が、「下の人たちは夜店でもやっているらしいなあ」と言った。

その推察が当っていた。女二人が神楽坂かどこかに夜店を出しているのだった。商品は何だか知らない。そのうち兄が学校を卒業して宇都宮砲兵聯隊へ行ってしまった。私はひとりで八畳の間代は払えないので、隣の三畳を一カ月三円で借りた。押入れが無かったから寝牀は敷きっ放しであった。大阪朝日新聞が短篇小説の懸賞募集を発表したので、ひとつ書いてやろうかと考え、学校から帰ると万年牀の上に坐って原稿を書いた。(それが一年後に当選

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

して、賞金二百円をもらい、私の生涯の運命の転換になった。）

或る冬の朝、学校へ行こうとして階段を降り、奥の部屋にむかって、行って来ますと声をかけると、奥から女房が私の名を呼んだ。唐紙は半分開いていて、女房が牀に寝ているのが見えた。薬の注射が強すぎたとか言って、二三日牀についているのだった。

「この寒いのに、学校なんかやめなさいよ。ここに来て、私と一緒に寝なさい。さあ……」と言って女房は蒲団の片端をまくった。こんな直接的な誘惑を受けたのは、冗談にしても始めてだった。しかしこの女はいかにも不潔だった。注射が強すぎたというのも六〇六号をやったのではないかと思われる程だった。その家には一年ぐらい住んでいた。

すぐ近処に、同じ早稲田の学生たちが二人下宿していた。或る朝私が登校の道すがら、彼等を誘いに行って見ると、彼等は別の友人と三人で花札賭博をやっていた。

「何だ、朝っぱらからバクチか」と言うと、

「徹夜でやってるんだ。お前も学校なんかやめて、仲間にはいれ」と相手は言った。

私は鞄を投げ出して仲間にはいった。そして始めて花札というものを覚えた。それから彼等と一緒に何度か徹夜もした。その下宿にいた一人は商科の学生で藤田と言った。後に朝日新聞社にはいり、論説委員を最後に停年退職したと思う。もう一人は水田という医大の学生

で、多分岡山の郷里へ帰って医者になった筈だ。
或るとき私は藤田のところへ行き、鞄の中から二羽の生きた鳩を包んだ紙包みを出して、下宿の小母さんに、
「これを料理して下さい。みんなで食べるんだから……」と言った。小母さんは、
「これはどこの鳩ですか」と問うた。
早大の隣に今でも穴八幡という神社がある。虫封じのお札を売っているらしい。神社の鳩が友達の下宿の軒に遊びに来ていたのを、私が手づかみにしたのだった。
「いけませんよ。神様の鳩を食べたりしたら罰が当りますよ」と小母さんは拒絶した。
私は学校の教室で鳩を放して遊んだ。それから窓をあけて逃がしてやった。もう四十年も昔のことである。

2

大阪朝日の懸賞短篇小説の当選発表は、昭和二年の三月末であった。当選者の中に平林たい子が居り、秋山正香がいた。それから花田歌子という女性がいた。この人は後に国民新聞の婦人記者になった。新大久保に自宅があって、後藤俊子という人と二人で住んでいた。後藤俊子は最近はたしか自由民主党の婦人部の顔役になっていたと思うが、器用な人で、その頃は人形造りで生活していたらしかった。

秋山正香とはその後三十年も交際がつづいた。埼玉県行田の足袋工場の何代目かの社長であったが、日本人の服装が和服から洋服に変るにつれて、工場は不景気になり、小説にうつつを抜かしている社長では業務の転換も円滑には行かず、とうとう工場も家屋敷もことごとく小説修業の犠牲にしてしまった。そして昨年の暮あたり、貧窮の果てに病歿した。六十三歳ぐらいだった。

彼は遂に無名作家ではあったが、郷里の方に取材した長篇「泥沼」の著書があり、晩年に

は津軽切支丹の史実を詳しく調べた長い小説がある。私はその原稿を読まされたが、彼に終生ついて廻った一種の泥くささと冗漫な描写癖とで、どうすることもできなかった。

彼は二十四五歳のころからもう足袋工場の社長で、子供も二人ぐらい居た。行田の町の郊外に木立に囲まれた立派な家があり、二階の書斎には朱塗の本棚に和漢洋の本を並べていた。早稲田実業学校の卒業で、学歴はそれだけだったが、独学でフランス語を学び、二三の短篇の翻訳などもある。私が始めて彼の家を訪ねた時は、私のような貧乏書生とは比較にならないブルジョアで、庭で弓を引き、鯉のあらいで冷たいビールを飲み、それから鰻の蒲焼きという御馳走であった。幼い娘には振袖の着物をきせていた。夫人は彼を呼ぶのに（旦那）と言った。

秋山は五尺九寸もありそうな痩せて背の高い男だった。酒を飲むのが早く、飯を食うのが早く、下駄を鳴らして道を歩くのが早かった。それほどせっかちなのかと思うと、実は田舎の人らしく馬鹿に悠々とした所があって、私の方がいらいらすることもあった。私は永いあいだその性癖が理解できなかったが、或るとき急に全部が解った。彼は足袋の売り込みのために年に何回か東北地方の問屋を廻り歩いていた。大阪朝日の当選小説は「好色道中双六」という題で、そういう旅にからむ物語を書いたものだった。

そうした旅行は一人旅だ。そして田舎町の商人宿に泊まりあるく。旨くない飯を食い、独りきりで酒を飲む。その味気なさが秋山の身に沁みこんでいて、自分の家で飯を食い酒を飲むときにさえも、ひとり旅の商人宿で、（飲んで食って寝てしまえ……）というような飲み食いをするらしかった。これは飽くまでも私の推量であって、秋山の旅の現場を見たわけではない。しかし近頃になって、若い頃は散々に行商の苦労を嘗めたという水上勉と酒席を共にして、彼が秋山正香と同じような飲み方食べ方をするのを見るに及んで、私は自分の推察が誤りでないことを知った。秋山は売り込みの独り旅の味気なさが骨身にしみていたのだ。

彼が二十七八歳のころ、溺愛していたたった一人の男の子がジフテリーで死んだ。彼は一枚の葉書に、（息子が血へどを吐いて死にやがった）と書いてよこした。私は秋山の、父としての悲しみよりも、もっと大きな怒りを感じた。

その時は私は、秋山の怒りだけしか感じなかったが、実は彼の心には怒りよりももっと大きな虚無感があった。持って行き場のない怒りは絶望感、虚無感に変る。その時以来、秋山の作品には一種のニヒリズムがつきまとうて、終生はなれなかった。生活態度にもそれが現われ、先祖代々の工場が潰れたときでも、家屋敷を叩き売った時でも、うす笑いをうかべて酒を飲んでいるような姿があった。

娘たちが各々結婚して、家庭に夫婦だけが残されるようになると、彼の妻は虚無的で投げやりな良人と生活の歩調が合わなくなり、娘の婚家の方へ行ってしまった。ひとり残された秋山は潰れた工場の事務所の二階に自分の居場所をこしらえて、世捨人のような孤独な暮しをしながら、やはり小説を書いていた。読書家で、博識だった。外国文学も日本の古典もよく知っていて、知識のひろいことでは私など足もとにも及ばなかった。

一度だけ、彼は傑作を書いた。「蕗の葉」という五六十枚の短篇で、すっきりとした歯切れの良い作品だった。私は早速手紙を書いて、激賞してやった。しかし傑作はたった一つだった。良い意味でも悪い意味でも、（ディレッタント）という言葉をそのままに生きたような男だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com